

# フレーゲのパズルとラッセルの存在論 — 導入資料

2021 年 9 月 3 日

早稲田大学

伊藤 遼

## 1. フレーゲのパズル

固有名の「意味」に対する一つの考えは、いわゆる「直接指示 direct reference」のそれ、すなわち、その「意味」は固有名の指示対象 (referent) に尽きるという考えである。そして、この考えには、フレーゲのパズルと空名の問題という二つの古典的な問題が知られている。<sup>\*1</sup>

フレーゲのパズルとは、直接指示の考えでは固有名をもちいた同一性言明が持つ「認識価値」ないし「情報 information」を説明できないという問題である。‘ $a = b$ ’ という形をした同一性言明、例えば、‘Hesperus is Phosphorus’ を考える。もし固有名の意味が単純に指示対象そのものであるとすると、この言明の「意味」は、‘Hesperus is Hesperus’ と同じであることになる。しかし、前者の言明には後者の言明にはない情報が含まれる以上、二つの言明の「意味」が同じであると考え難い。

フレーゲはこの洞察を踏まえて、固有名の「意味」に *Bedeutung* と *Sinn* という二つの要素を認める。前者は詰まるところ固有名の指示対象のことであり、後者は「指示対象の与えられ方」のことである。ただし、ここでの「与えられ方」とは、個々人によって異なる主観的なものではなく、客観的なものである。この区別を踏まえれば、‘Hesperus’ と ‘Phosphorus’ という二つの固有名は、同じ *Bedeutung* (指示対象) を持つが、異なる *Sinn* (指示対象の与えられ方) を持つということになり、それゆえ、上述の二つの言明もまた異なる「意味」を持つことになる。

さらに言えば、*Bedeutung* と *Sinn* の区別は、「空名 empty name」(指示対象を持たない固有名) の問題も解決する。直接指示の考えを採るならば、指示対象を持たない固有名とは文字通り「意味」を持たない表現である。しかし、現実には、そうした固有名を「意味」ある仕方でもちいることができる。有名な例は、‘Vulcan does not exist’ であろう。しかし、もしフレーゲのように *Bedeutung* と *Sinn* を区別するならば、空名とは前者を持たないが後者を有する表現として説明できるようになる。

## 2. ラッセルの記述理論

フレーゲによる *Bedeutung* と *Sinn* の区別と並んでよく知られる、古典的な言語哲学の遺産は、ラッセルが ‘On Denoting’ において提示した「記述の理論 theory of descriptions」である。ラッ

---

<sup>\*1</sup> これらの問題とそれらに対する応答については、『言語哲学大全 I』(飯田隆、勁草書房、1987)、『言語哲学大全 III』(飯田隆著、勁草書房、1995、314–327)、『名前に何の意味があるのか — 固有名の哲学』(藤川直也、勁草書房、2014) や『名前と対象：固有名と裸名詞の意味論』(和泉悠、勁草書房、2016) を参照されたい。

セルは、確定記述（the からはじまる単数表現）を含む言明全体をそれを含まない言明へと論理学をもちいて書き換えることで、確定記述の「意味」を説明した。

$$G(\text{the } F) =_{\text{Df}} \exists x (\forall y (x = y \leftrightarrow F(y)) \& G(x)).$$

彼の考えによれば、‘G(the F)’ すなわち ‘the F is G’ という形の言明はつねに、この定式化に従って、‘the F’ という確定記述を含まない言明へと書き換えられることになる。

さて、記述の理論をもちいると、確定記述に関して生じる、固有名の場合とよく似た二つの現象を説明することができる。一つは、‘a = the F’ という形の同一性言明がしばしば認識価値を持つという現象である。例えば、‘Scott is the author of *Waverley*’ という言明を考えよう。ラッセルが論じたように、‘George IV wanted to know whether Scott was the author of *Waverley*’ と言えるのは ‘Scott is the author of *Waverley*’ という言明には ‘Scott is Scott’ という言明にはない情報が含まれるからである。このことは、記述の理論に従えば、何ら不思議なことではない。というのも、記述の理論によれば、‘Scott is the author of *Waverley*’ という言明は ‘Scott is Scott’ という同一性言明とはまったく異なる形式を有する言明であることになるからである。

さらに、記述の理論は、“the present king of France” のような「空」な確定記述、すなわち、記述を一意的に満たす対象（denotation）が存在しないような確定記述の「意味」もまたうまく説明することができる。おおざっぱに言えば、記述の理論に従うと、‘G(the F)’ という形の言明は、記述を一意的に満たす対象の存在をその主張内容の一部とするものであり、それゆえ、そうした対象が存在しない場合には当の言明は端的に偽になる、ということである。

### 3. ラッセルの「論理的固有名」とそれに対する標準的説明

ラッセルは、われわれが普段もちいる固有名はどれも本来の固有名（「論理的固有名」）ではなく、短縮された確定記述であると論じる。<sup>\*2</sup>彼にとって論理的固有名とは、われわれがその指示対象を「見知っている have acquaintance with」ような表現であり、より具体的には、‘this’ や ‘that’ といった表現である。これらの表現は、個々人の経験において知覚されるセンスデータ（sense data）を指示すると彼は考える。

ラッセルはどのようにしてこのような結論に至るのか。言語哲学における標準的な説明によれば、彼の思考は次のようなものである。<sup>\*3</sup>まずもって、論理的固有名とは、直接指示の考えが当てはまるもの、それゆえ、フレーゲのパズルや空名の問題がそもそも生じないようなものである。そして、この考えから論理的固有名がセンスデータを指示するという考えが次のように導かれる。

- (A) われわれが指示対象を見知っているとき、その指示対象についての同一性言明はどれもわれわれにとって認識価値を持たない。

---

<sup>\*2</sup> ただし、「論理的固有名 logically proper name」という表現は（伊藤の知る限り）ラッセルの本人のものではない。

<sup>\*3</sup> こうした説明は、例えば、『言語哲学大全 I』（飯田隆、勁草書房、1987、193–207 頁）や「ラッセル」（戸田山和久、『哲学の歴史 第 11 巻 論理・数学・言語』所収、2007、230–233 頁）において採用されている。本発表は、こうした説明を退けるものであるが、もちろん、これらが依然として言語哲学やラッセルの論理学に関する見通しのよい導入であることは変わらない。

(B) われわれが指示対象を見知っているとき、その指示対象が実は存在しないということはある  
得ない。

(C) われわれが見知っている対象はセンスデータである。

(A) を認めるならば、固有名をわれわれが見知っている対象にのみもちいる限り、フレーゲのパズルは生じないことになる。(B) を認めるならば、固有名をわれわれが見知っている対象にのみもちいる限り、空名の問題は生じないことになる。したがって、フレーゲのパズルや空名の問題がそもそも生じないような固有名こそが論理的固有名であると考えれば、論理的固有名はわれわれがその指示対象を見知っているような表現であることになる。これと (C) を合わせれば、論理的固有名とはセンスデータを指示するような表現であり、それは 'this' や 'that' といった表現であるという結論が得られる。さらに、もしラッセルが (B) からは（デカルト的な懐疑を通じて）(C) が帰結すると考えるならば、この結論は、彼にとっては論理的固有名の性質、すなわち、直接指示の考えのみから得られるということになる。